

公益信託 エスペック地球環境研究・技術基金

研究報告書

2025年10月27日

五三 裕太

九州大学 大学院比較社会文化研究院

助教（特定プロジェクト教員）

研究テーマ

地域住民の流域環境意識を形成する川の体験プログラムの開発

研究成果の概要

本研究の目的は、愛知県岡崎市で2021年に発足した市民団体「ONE RIVER」の活動に着目し、川の体験を通じた意識変容の過程を分析することで、地域住民の流域環境意識を形成する川の体験プログラムを開発することであった。本研究では、これらの検討を地域協働で進める活動母体「ONE RIVER 流域研究室」を発足し、そのキックオフイベントを開催して議論の機運を高めた。その後、ONE RIVERのメンバーに関するインタビューデータの解析と、プログラム参加者へのアンケート調査をおこなうことで、人間の流域環境に対する意識の形成を動的に捉えるフレームワークを構築した。その成果は、国際学術誌1編と、国際会議発表1件として発信した。

ONE RIVER 流域研究室の立ち上げ／キックオフイベント（10/18）の開催

本研究の助成決定および開始にあたり、より密度高く、研究と実践を接続することを企図して、「ONE RIVER 流域研究室」という活動母体を立ち上げた。ONE RIVERとは、愛知県岡崎市の中心を流れる乙川河川敷の活用と流域の視点で地域文化の啓発をおこなう任意団体であり、2021年に発足した。報告者は、すでに2022年から岡崎市においてONE RIVERの協力を受けながら研究活動を実施してきた。具体的には、インタビュー対象者の斡旋や、アンケート調査の協力・調整などである。しかし、本研究プロジェクトの推進には、単なる協力を受けるだけでなく、実践と研究の相互往還が必要になる。そこで研究者である報告者と、ONE RIVERの事務局3名、有志メンバー2名の計6名で、定期的な研究の議論と、戦略的なプログラム実施をするためのチームを構築した。これがONE RIVER 流域研究室である。

ONE RIVER 流域研究室の立ち上げに際し、報告者らの活動を広く周辺の関係主体に周知し、さらに研究成果の社会還元に向けた方策を検討するため、キックオフイベント

を開催した。具体的には、2024年10月18日に「おとがわふむふむトーク」という名前のトークイベントを実施した。河川環境の専門家である知花武佳先生（政策研究大学院大学教授）を招聘し基調講演いただくとともに、地元まちづくり関係者と報告者によるパネルディスカッションをおこなった。その結果、「流域環境意識」を形成する社会的な意義が了解されただけでなく、その技術的な課題についても各パネリストの実体験に根ざした意見交換がおこなわれ、現状の到達点が示唆された。



なお、キックオフイベントの企画運営は、ONE RIVERに事業委託した。これは、現地での会場準備に加えて、一般地域住民も参加・理解しやすい形で、研究のコンセプトを伝えるイベントにすることを目的としたためである。「豊かに生きのびるための『おとがわ学』」というテーマ設定や、河川敷イベントとの併催なども、すべて参加者の募集を円滑におこなうためのアイデアとして提案されたものであった。パネリストの選定に関して議論をした結果、中山間地域で林業・農業をおこなう唐澤晋平氏（一般社団法人奏林舎 代表理事）、中根利枝氏（マルタ園/marucafe 広報・企画・営業マネージャー）および都市部で河川敷活用の実践に取り組む石原空子氏（ONE RIVER プロジェクトスタッフ）という若手活動家3名を招くことができ、先端的な議論をおこなうことができた。また、チラシでの積極的な広報活動の結果、岡崎市中心部でのイベント会場にて、30名を超える現地参加者を集めることができた。当日の様子は下記の通り報告された (<https://one-river.jp/news/report/entry-859.html>)。

① ONE RIVER のメンバーに関するインタビューデータの解析

本研究のトピックの一つ目は、市民団体 ONE RIVER のメンバーを対象とした意識変容の分析である。既存の調査成果（活動内容の変化分析）を下敷きとし、2015年から2024年に発行された活動の告知・報告資料に関するテキスト分析と、ONE RIVERの主要メンバー10名のインタビュー発言の分析をおこなった。

その結果、岡崎市による乙川河川敷周辺空間の再整備と、その活用に対する市民参加の促進を通じて、人々に流域環境の持続可能な管理や気候変動適応アクションに対する主体性が育まれるプロセスを図1の通り概念化することができた。

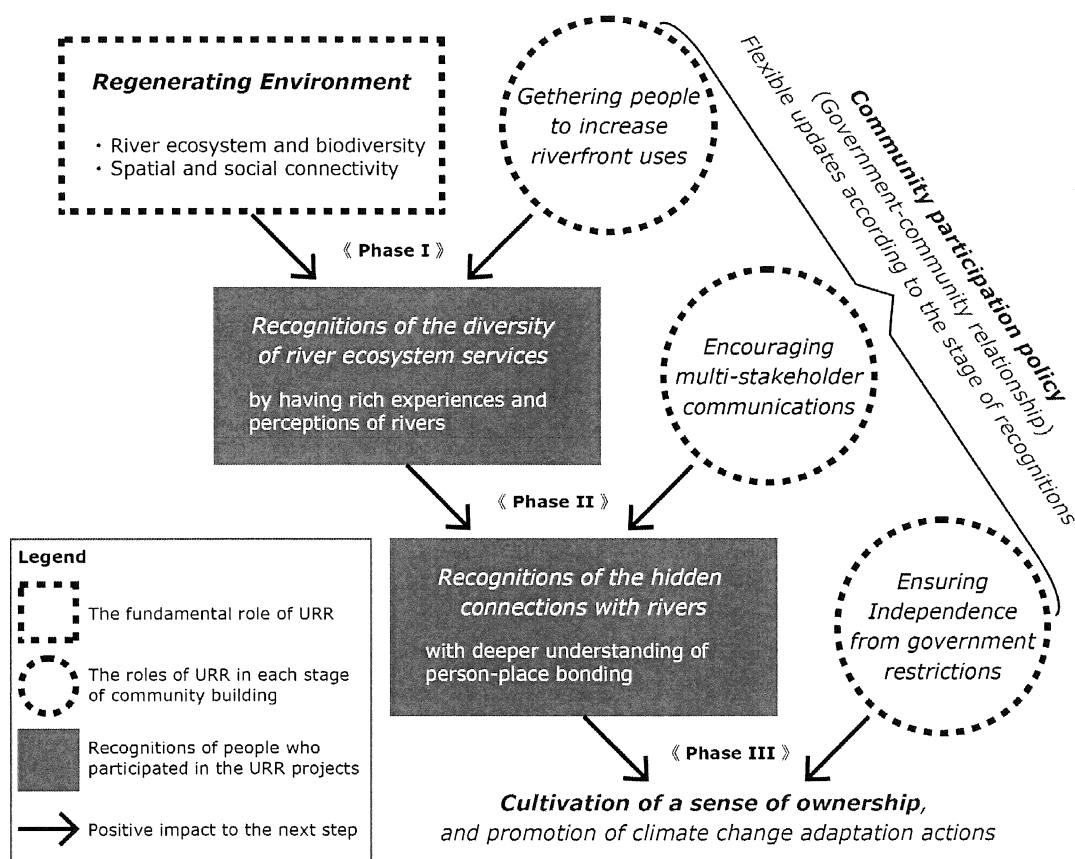


図1：河川敷活用への市民参加を通じた当事者意識の涵養プロセス
(Itsumi et al., 2025, *Frontiers of Water*; Figure 9 より転載)

この図は、ONE RIVER のメンバーが、元々河川敷空間の賑わい再生に参加していたところから、現在のように流域をフィールドとした環境ガバナンスを自主的に推進するようになるまでの、エポックとなる2つの認識変化を示したものである。まず、人々は川の多面的な生態系サービスを認識し、その結果として自分たちの暮らしと河川流域との結びつきを実感し、主体的な行動を開始している。

以上のメカニズムを理解するための最も有効な例として、アユの往来に対する理解のプロセスをあげることができる。中心市街地の乙川河川敷は、その下流に農業用取水堰があり、春から秋は水位が高くなって水上アクティビティ（舟、SUP など）が実施できる一方、秋から春は水位が下がるためそれらのプログラムが実施できない。当初、河川敷活用に関わるメンバーは、これを賑わい創出のための欠点と捉え、通年での水位上昇を要望していた。しかし、秋から春に水位を下げるのは、上下流でのアユの往来を阻害しないためであることを知ると、彼らは川に対する認識を改めることになる。そして、水位の下がった河川だからできること（河原の活用、川底の掃除など）に視点を広げながら、彼らの活動を展開していった。さらに、都市の排水による汚染や、河川の改修によって生態系に影響を与えることも認知し、彼ら自身の暮らしと川との関係を捉えることにもつながった。

② プログラム参加者へのアンケート調査

次に、ONE RIVER のプログラムの参加者およびその知り合いである一般市民を対象に、アンケート調査を実施し、その意識の特徴を分析した。2025 年の 1 月～4 月に、ONE RIVER 流域研究室でアンケート内容を議論し、5 月および 6 月にリバークリーン、となりの田んぼ、Let it Camp の 3 つのプログラム参加者を対象にプレ調査を実施した。合計 27 の回答を得たため、その内容と、既往のアンケート結果を合わせて分析し、さらに①の研究成果と合わせることで、図 2 の通り地域住民の流域環境に対する主体性涵養メカニズムのフレームワークを構築した。

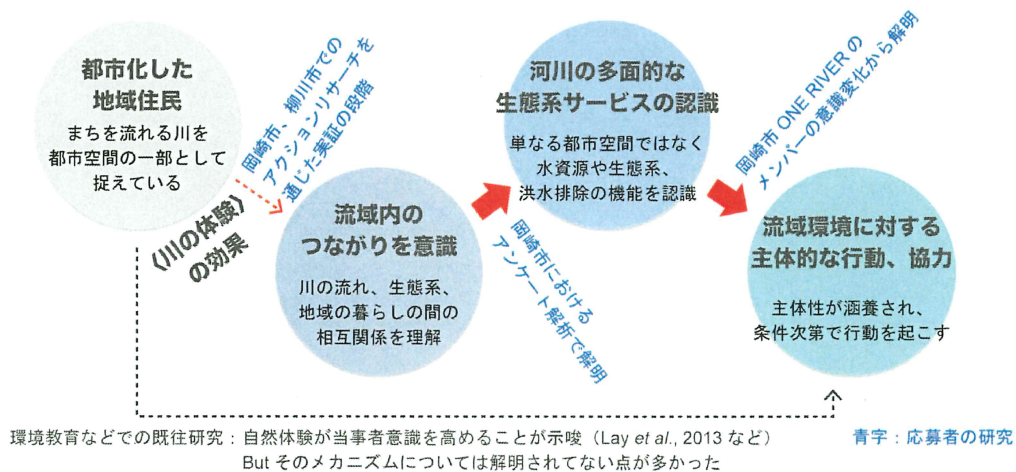


図 2：地域住民の流域環境に対する主体性涵養メカニズムのフレームワーク

(Itsumi et al., 2025, 国際社会水文会議発表資料より和訳して転載)

この成果は、これまで ONE RIVER のメンバーという短期間に集中して川を体験した主体の意識変化を分析してきたのに対し、広く一般の市民意識を分析できたことで、川の多面的な生態系サービスを認識する前段階に「流域内のつながりを意識する」フェーズがあることを特定した点にある。すなわち、人々が川の流れや生態系を実感し、流域のつながりを意識できるようにする点に、川の体験の貢献すべき役割があると想定された。また、現在の参加者がどの程度流域のつながりをとらえているかについても、参照点となるデータを得ることができた。現在、より多くのプログラム参加者、一般市民の意識を調査することで、具体的にどのような川の体験が流域のつながりに対する意識を形成するのか、詳細な分析を進めている。

調査研究成果の取りまとめ・発信／今後の展開

以上で示した学術成果は、下記の国際学術誌 1 編と、国際会議発表 1 件に取りまとめ、発信をおこなった。また、学術誌に取りまとめた成果については、さらにもう 1 件の国際会議で発表し、アウトリーチにつとめた。

まず、① ONE RIVER のメンバーに関するインタビューデータの解析については、2025 年 4 月に国際学術論文誌（オープンアクセス）にその成果が掲載された。この学術誌は、社会水文学（Socio-hydrology）という学際的な研究を扱う萌芽期の論文集であり、今後読者層が増えていくことを想定している。また、この論文の存在を広く欧州の河川研究コミュニティに認知してもらうため、2025 年 7 月に I.S.Rivers というフランス・リヨンで開催された国際会議で口頭発表をおこなった。I.S.Rivers は、川に関わる世界中の研究者・実践者が分野の垣根を超えて集まる大変ユニークなイベントであり、本研究発表は新テーマの中で *Rivers and society*（川と社会）で特集された。

Yuta ITSUMI, Takeyoshi CHIBANA, Satoshi WATANABE, "Cultivating a Sense of Ownership over Climate Change Adaptation Through the Expansion Process of Local Community Activities Stimulated by Urban River Restoration in Okazaki City, Japan," *Frontiers in Water (Water and Human Systems)*, Vol. 7, 2025.4, DOI: <https://doi.org/10.3389/frwa.2025.1537235>

Yuta ITSUMI et al., "Expansion Process of Local Community Activities Stimulated by Urban River Restoration in Okazaki City, Japan," *I.S.Rivers*, Lyon, France, 2025.7

次に、② プログラム参加者へのアンケート調査の暫定成果については、2025 年 7 月に東京で開催された国際社会水文会議で口頭発表をした。この発表では、本助成金を受けて実施してきた地域協働型の研究活動（ONE RIVER 流域研究室の発足、定例のオンライン議論、アンケート実施など）について網羅的に報告をおこない、独自の研究・実践融合型のプロジェクトを広く認識してもらうことにつとめた。その結果、IHE Delft の准教授である Emanuele Fantini 氏や、インドの水に関する博物館チームから強い関

心を示してもらうことができた。さらに、River-Cities Network という国際的な河川活用・再生ネットワークの事務局に、報告者らの取り組みが高く評価され、日本の第一号プロジェクトとしてパートナー登録されるに至った。現在、担当 Web ページを編集中である (<https://www.rivercities.world/projects/river-otogawa>)。

Yuta ITSUMI *et al.*, "Conceptualizing an Approach to Cultivating a Sense of Ownership: Attempts by the Community Research Lab of the Volunteer Group ONE RIVER in Okazaki City, Japan," *The 2nd International Sociohydrology Conference, Tokyo, Japan, 2025.7*

今後は、さらに本研究の調査・分析を継続しながら、参加者の主体性涵養に向けた効果的な川の体験プログラムを検討・実践していき、その効果を学術的に検証することを目指している。特に、イベント企画・運営に限らず、恒常的に関心層の意識向上を図る「乙川 Web 博物館」の作成なども予定している。

おわりに／謝辞

私は、環境問題は人間の思いやりの問題であると考えています。地球レベルで危機感を煽り、課題解決していくアプローチも重要であることは論を俟たない一方で、地域で暮らす地域住民一人一人の意識に深く切り込み、他者や生き物、環境に対する思いやりを育てていくアプローチも同時に重要です。

しかし、そのような住民の意識に深く切り込む研究は、研究者単体では実施することに様々なハードルがあるのも事実です。今回、エスプレック地球環境研究・技術基金を助成いただけたことは、地元協力者にとっても自身の活動が評価されたという点で嬉しいことであり、私の研究に対する信頼を高め、積極的に活動を進めるモチベーションを形成することにつながりました。これは、私のような若手研究者が地域で活動をしていく上で、何事にも変え難きことでした。

今後も、研究を進め、環境問題解決に貢献する中で、この助成に対する恩返しをしていければと思います。誠にありがとうございました。